

## 青年期の同一性形成に影響を及ぼす重要な他者との関係性

金 美 伶\*

### Relationship with Important Others Who Affect the Identity of Adolescence

KIM Miryoung

#### abstract

Identity confusion is cause of maladjustment of adolescence. Although this theory was pointed out from before, research of maladjustment relation with identity confusion of adolescence was seldom conducted. In research of child-parent relationship that research of development of not changing pattern of attachment was treated as important research. I exhibited doubt in a continuity of attachment theory. In this study, maladjustment of adolescence is considered from the viewpoint of identity confusion, and from the viewpoint of negative experience of the infancy. Result of this study indicated that cause of maladjustment of adolescence is identity confusion rather than negative experience in infancy is a direct factor.

Keywords : identity, negative experience in infancy, adolescence, maladjustment

#### 序論

青年期の不適応は、幼児期における否定的関係がその後の対人関係に否定的な影響を与えることによって起こると指摘されてきた。しかし、人は常に新たに他者とのかかわりの再体制化を続けていく存在である。過去における重要な他者との否定的関係は消すことはできないが、再体制化あるいは内在化することでその関係が肯定的関係に変化し得る可能性を排除してはいけない。すなわち、乳幼児期における母親との愛着関係が後の人格発達に間接的影響を及ぼすことは可能性として否定できないが、それが愛着関係の質の連続性につながるとは言いにくいと考えられる。幼児期にある特定の否定的傾向が生じたとしても、幼児期以後の経験で肯定的に軌道を修正することは十分に可能である。なぜなら、青年期は、今までの自己像を再構築し、現実に立脚した自己像を構築できる時期であるからである。「幼児期に否定的な親の養育態度だったために、青年期に不適応が発生する」という一直線の因果関係で結ぶことは無理である。幼児期の親の養育態度は青年期の不適応に影響力を及ぼす要因ではあるが、このとき「親の養育態度」ということ以外の要因が介入された場合を考慮しなければならない。青年期の同一性混乱を介した場合には、親の養育態度は同一性混乱に影響を及ぼし、間接的に不適応に影響を与えることが可能性として推測される。自己概念の形成期である青年期の不適応の症状は、幼児期における親子関係の否定的経験からよりも、同一性混乱が原因であることが多いと考えられる。本研究では、愛着理論の連続性に疑問を呈示し、幼児期における否定的関係がその後の対人関係に否定的な影響を与えることによって青年期の不適応が起こるのかについて、「幼児期の否定的親子関係」「同一性形成」の観点から考察する。

---

キーワード：同一性、親子関係、青年期、不適応劇

\*平成12年度生 人間発達科学専攻

## 本論

### I. 青年期と同一性

#### 1. 青年期の認知能力の発達に伴う同一性

青年期の同一性形成のプロセスを支えている最も有効な要因は、認知能力の発達であると思われる。青年期の認知が児童期と異なる点は、脳・神経系の成熟を基盤とし、情報処理の速度や正確さが頂点に達し、その結果、高次の認知能力が発揮できる点である（楠見,1995）。児童の思考は具体的なものや現実的なことから行なわれるが、青年期に入って形式的操作（Formal operation）が可能になると、抽象的なものや現実をこえた可能性について、理論的に正しい思考や推論を行なう事ができるようになる。形式的操作の能力が発達し始めると、自分自身を意識するようになり内省的になる。自分自身に深く考えるようになると、自己概念や同一性が発達する。青年期における、自分自身を内省し、将来を見通して生き方を決定する力は、かなりの部分、こうした認知能力に支えられていると考えられる。

#### 2. 同一性の類型化

Marcia (1966,1976) が同一性地位（identity status）の概念の測定に使っている方法は、「危機（crisis）」と「傾倒（commitment）」である。この方法は、それまでの人生に、意味のあるいくつかの可能性について迷い決定しようと苦闘した時期があったか否かの「危機」という基準と、自分自身の信念を明確に表現したり、それに基づいて行動することができているか否かの「傾倒」という2つの基準を用いて、青年の同一性の問題への対処の仕方を4つに類型化した（同一性確立・モラトリアム・早期完了・同一性混乱）ものである。

同一性確立者は、過去に危機を経験し、現在はその危機を克服して、選択した対象に傾倒している。早期完了者は、過去に危機を経験していないが、親や社会の承認する対象を受け入れ、現在その対象に傾倒している。モラトリアム者は、現在、危機の最中であり、傾倒は漠然としたものであり、はっきりしていない。同一性混乱者（identity confusion）は、過去の危機の有無に関わらず、現在傾倒していない。これらの4つの地位の中では同一性混乱者が不適応の問題を引き起こすことが多い。同一性混乱者は自分が何のために存在するのであるか、また自分が何者であるのか分からないことである。「自分が何者であるか」を分からない青年は、自分を問い詰め「この世に自分の存在価値なんて何もない」という自己否定を行い、自分を傷つけたり、あるいは「自分が何者であるか分からない」という、不安から逃れるために「他者は全てだめだ」という、他者否定を行い他者を傷つけたりする（船津・安藤,2002）。青年期の同一性混乱が原因で不適応の症状が引き起こされることが多い（鏝・山下,2001）。

### II. 青年期の同一性混乱と精神障害

#### 1. 青年期の同一性混乱及び不適応として現れる精神病理

青年期は心身両面の変化が大きく、人間関係や社会的立場の変化も大きな時期である。自我に目覚めた青年は、自己、社会、人生などについて思索し、自分なりの考えや態度を形成しようとする。しかも、その精神は理想を目指し、感情は美しいものにあこがれる。しかし、成熟の過渡期にある青年は未熟であり、社会も矛盾をはらんでいる。そのような自己や社会に対面したとき、敏感で動揺しやすい感情をもつ青年は、理想と現実の食い違いや、理想に対する自己の無力感にさいなまれ、懐疑や自己嫌悪に陥り、苦悩することになる。青年は様々な変化を経験しながら悩みと戦う過程で、自己を成長させていくわけであるが、これらの変化にうまく適応したり、対処したりできないと、不適応状態に陥ってしまう。苦悩をいかにして乗り越えるか、その過程において何かを吸収するかが、青年の同一性の確立を左右する鍵となる。

村瀬（1976）は、青年期の危機程度を規定する要因として2つの要因群を挙げている。第一は、青年期に不安・葛藤・挫折をもたらしやすい内面的状況な負の要因群である。これには、基本的に両親との関係の中で形成される内的不安、葛藤、心理的傷つきやすさが含まれる。両親への強い依存心や反発、あるいは両親やそれに代わる人々との交流体験の希薄さなどは、それらが無意識的であればあるほど、青年期になると個人の安定を脅かす大きな要

因となる。また、感受性、無内省力、自己拡張欲も含まれる。感受性が鋭く、内省力が豊かな青年ほど、情緒的な葛藤や挫折の苦み、あるいは罪悪感による苦悩が大きく、自己拡張欲や向上欲の強い青年は種々の障害に直面する確率が高くなる。

第二は、負の要因を克服する方向に作用する正の要因群である。それは、自己の苦悩や危機を克服できるある種々の並外れた自我の強さ（自己の才能への自信、才能現実への強烈な志向心など）であり、支援的な個人的な社会的な条件（個人が活動できる物、就職の機会、肉親・友人・仲間からの支持、社会の価値体系や理想との一致など）である。正の要因群は、支援的な個人的な社会的条件に恵まれており、しかも負の要因群がそれほど強くないため、危機を招くことには至らない。それに対して、負の要因群は正の要因群の力をはるかに上回って、自我の力でそれを耐え難くなり、自己否定、あるいは他者否定を行い、否定的同一性により不適応の症状を引き起こすと考えられる。

### Ⅲ. 青年の同一性形成と社会

#### 1. 同一性を育てる重要な他者との関係性

青年期における同一性形成は、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者との視点との間の食い違いを相互調節によって解決するプロセスである（杉村,1998）。すなわち、同一性形成の中心的な作業である危機を、自己の欲求・関心のみではなく他者の意見・期待を考慮したり、相談や討論といった形で他者を利用したり、自己と他者の視点の間の食い違いを交渉などの手段で解決しながら、人生の重要な選択を決定していくプロセスの中で同一性は形成されることである。このような同一性危機のプロセスにおける自己と他者の関係の認識を「関係性」と呼ぶ（杉村,2001）。関係性とは、「重要な他者との相互作用及び継続的な積極的な関与、つまりコミットメントにより構築・再体制化される、他者との関係の中での個人のあり方」を示している。塩見（2000）によれば、青年期の課題である同一性形成をもたらすものとして「個性化」と「社会化」の2つの過程を挙げている。自分らしさを大切に、それを打ち出していくことと、自分と異なる考えや感情を持つ他者を受け入れていくことのどちらも自己の形成において欠くことができないものと言える。しかし、そのバランスをとることは難しく、青年期はその葛藤の中にある（藤井,2001）。

同一性の形成において関係性が果たす役割は、男性と女性でその程度や質に違いが見られる（Gilligan,1986;Josselson,1973;Skoe,1998）。Josselson（1973）は、大学生の同一性形成を精神力動的な観点から男女を比較・分析した結果、男性の場合に同一性形成が学位の取得や経済的な成功のような客観的な基準に左右されることに対して女性は、重要な他者との反応に依存することを見出した。男子は子供の頃から、分離一体化という個としての自立を要請されて成長していくのに対して女性は、世話や他者との関係といった人とのつながりを重視しながら成長していくことが示された（Chodorow,1978）。女性の同一性発達は、他者との関係によって支えられ促される（Josselson,1996）。このように今までの研究の結果は、「個人的領域に基づく同一性」と「対人的領域（関係性）に基づく同一性」を形成して行くことに、男女の差があると考えた。

しかし、最近の研究結果（杉村,1998,2001）によれば、男性と女性が社会的にも家庭的においても同じ役割を担うことが多くなったため、次第に個人的領域と対人的領域という概念で男女を分けることに意味が失われたと指摘している。そして、男性と女性の人格特徴に相違が見られるのは社会によるものであり、本質的な相違によるものではないと考えるフェミニズムの高まりも加わり、個人的領域と対人的領域で男女を区別することに対する批判が現れた。この批判をきっかけに、個人的領域—対人的領域という2分法を強調するのではなく、対人領域を男女両方の同一性に関わる領域としてとらえようという動きが出て来た。関係性の問題は同一性の基礎的な要素（杉村,2001）として女性のみではなく、男性にとっても（Thorbecke & Grotevant,1982）重要である。女性のライフサイクルが見直されつつある現在では、「人とつながりつつの自己実現」に対する実証的検討をしていくことが、同一性概念を適合的にとらえ方である（鏝・下山,2001）。すなわち、他者とのかかわりの中で「自己」を実現しつつ、相互の成長を促進するといった過程が、同一性形成のために男女ともに望ましいと考える。

社会的文脈の中で形成される同一性と他者と関係性を重視するという観点は、最近の意義ある動向の一つであろう。「自分というもの」と「ひと」を確かに感じとって、人とつながりつつの自己表現・自己実現・自己確立を

図るところに、同一性形成の過程があると考えられる。このように青年期は、重要な他者との関係のなかで同一性が形成されるのであろう。従って、同一性を個人内の要素ととらえる従来のパラダイムから、他者との結びつきを考慮に入れたパラダイムに転換しなければならない。なぜなら、「人とつながりつつの自己実現」が青年期の同一性形成に不可欠であるものであるからである。

文化・社会・家族・仲間・職場といった文脈が個人の同一性形成に影響を与えるとともに、個人の同一性が文化・社会・家族・仲間・職場といった文脈を形成する (Grotevant,1987)。どのような大規模な文脈であっても、実際にはその影響は日々の身近な他者との対人的なプロセスによって媒介されている (Adams,& Marshall,1996;Steinber,1995)。青年側から見れば、身近な他者との日常的なコミュニケーションを通して、文化、歴史、社会といった文脈と関係するのである。従って、同一性形成のプロセスについて言えば、青年は、自分と同じ文脈に生きる家族や仲間、恋人、教師などの身近な他者との相互作用を通じて、その文脈が規定する範囲の選択肢の中から職業やイデオロギーを選択するといえる。つまり、身近な他者は、青年に直接影響を与えるのみではなく、文化、歴史、社会といった大規模な文脈のエージェントとして、これらの文脈の影響を媒介すると考えられる。

従って、青年期の同一性を形成するきっかけは、両親・友人・恋人というような重要な他者との関係性の中にあり、このような関係性は同一性を形成するために不可欠な土壌として存在 (杉村,1999) する。関係性の中での個人の主体的な位置付け、個としての同一性を発達させるのである。Kroger (2000) は、青年期の同一性発達に影響を与える3つの文脈を指摘している。第1は家族であり、第2は友達であり、第3は教育的・職業的環境である。以下の3つの文脈に対して詳しく調べてみることにする。

### 1) 青年期の同一性を育てる家族・親子の関係性

林・岡本 (2003) は、家族同一性と個同一性との間に正の相関があり、家族同一性の発達、個としての同一性形成に重要な意味をもつことを指摘した。林・岡本 (2003) は、家族同一性が個としての同一性形成に及ぼす影響力の男女差を次のように指摘している。分離—固体化過程において、男子は、母親に「呑み込まれる不安」を抱くのに対して、女子は母親に「分離不安」を抱くため、男子に比べて女子の方が分離—固体化が困難だと指摘している。また、母親と娘は強い絆を持っている (斉藤,1993)。父親は、家族と関わる機会が少ない。このため、男子青年は、家族と関わるのが重要なことである、というのは認知していても、父親を通じてモデルを得ることが困難である (林・岡本,2003)。すなわち、青年の個としての同一性の形成には母親の影響が父親より大きいことを指摘している。

青年の同一性は両親との関係における「独自性」と「結合性」の相互作用の中で現れる。特に、結合性のような、家族による支持的な雰囲気が基盤にあつてこそ、青年が他者と異なる自分の視点を作り上げることが可能となる。家族関係の中で青年が体験する独自性 (individuality) と結合性 (connectedness) のコミュニケーションは、他者の視点を明確にするトレーニングとなり、同一性形成を促進する (Kroger,2000)。つまり、青年に心理的なサポートを与える役割を果たしている家族関係が同一性を探究する基本的な力を養うと考えられる (Grotevant,& Cooper,1985; 杉村,1999)。

### 2) 青年期の同一性を育てる友達関係

同性・異性の友人との関係は大学生の同一性と有意に関連している (加藤,1989)。自分にとって本当に必要な友人を選択し、個と個の深い付き合いを求める友達関係は、青年期後期に大きな質的転換を遂げる (落合・佐藤,1996)。青年期は友人関係の重要性が高まる時期であり、友人との関係が学校への適応と関連している (酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村,2002; 大久保,2005)。青年期における親友・恋人などの重要な他者との信頼関係が、自尊心や孤独感、恋愛関係のあり方、人生における満足度やディストレスと深く関連がある (酒井,2001a; 酒井,2001b)。積極的な友達関係をもった学生には集団生活の中で自律的な価値体系が形成されるに至り、彼らは卒業後もそれに基づいて主体的に自らを方向づけることができる。友人との深いつながりからくる一体感や連帯感は、同一性形成の作業に向かう青年を側面から支える。こうした結びつきは、同一性における個としての感覚や関係の中における自己を確認することに寄与する。友人や恋人との出会いや別れ、関係の深まりや希薄化の中で青年は新しい視点を学んで、自己と他者との視点の間に新しいバランスを構築すると思われる。

青年期の同一性形成をとらえていく場合、親子関係のあり方を重視するか、それとも交友関係のあり方を重視するか、見解が分かれている。Cooper & Lopez (1985) は、これまでの青年期の自我発達に関する親子関係と交友関係理論を次の3点からまとめている。①拮抗力 (cross-pressure) 理論は、つまり青年期の親子関係と交友関係とは拮抗し、親子関係に葛藤が生じた青年は、交友関係を重視しやすいというものである (Brittain, 1963)。この理論は、幼児期の親子関係のあり方を自我発達の観点にいれず、現在の親子関係と交友関係のあり方を重視している。②二つの世界 (two-worlds) 理論は、Sullivan (1953) に代表される理論で親子関係と交友関係の内容は、別個であり、前者は上下の関係、後者は対等の関係であるにとらえるものである。この理論は、とくに友人関係が活発となる前思春期 (pre-adolescence) を重視している。③社会化 (socialization) 理論は、つまり乳幼児期からの親子関係を社会化の基盤にとらえ、この時期の親子の情緒的結合が交友関係上の社会化へと展開していくものであるにとらえるもの (Radke-Yarrow, Zahn-Waxler & Chapman, 1983) である。

本論文では、3つの理論の中で社会化 (socialization) 理論を裏付ける研究を踏まえながら、「青年期の不適応」、 「幼児期の否定的親子関係」、 「同一性混乱」という3つの関係について考察する。長尾 (1999) は、親子関係が基盤となり青年期の交友関係が展開されると指摘し、親子関係が不安定な場合には、青年期の自我発達上の危機状態に陥ると主張している。親への愛着が安定的である場合は、対人関係も安定的であり (Markiewicz, Doyle, Brendgen, 2001), 対人経験もよい (Lapsley, Rice, FitzGerald, 1990)。これに対して丹羽 (2005) は、親子関係の不安の低い人は、親子関係の不安の高い人よりも、ストレス期において孤独感や対人関係不安を緩衝できるが、不安定な愛着の質の違いによって対人関係に表れる不安の差があることを指摘している。

Archibald, Linver, Graber & Brooks-Gunn (2002) は、幼児期の社会化理論の観点から、親子関係と不適応的な食事行動との関連を、縦断研究の手法を用いて検討を行ったが、一貫した結果が得られなかったと報告している。Furnham & Adam-saib (2001) は、親の養育態度と高校生や大学生の食行動・態度と不適応との間には関連が見られなかったと報告している。この点に関して前川 (2005) は、高校生や大学生の食行動・態度と親の養育態度との間には親子関係だけではなく、様々な社会的要因によって影響を受けていると指摘する。すなわち、青年期には、他の要因が媒介されて親の養育態度の影響力に変化が現れることが想定される。

酒井 (2001) は、愛着モデルの形成は幼少期に最も敏感であり、幼少期の愛着関係である母親関係は、青年期の愛着関係である友人・恋愛関係への移行に間接的な役割を担うと指摘している (Bowlby, 1973)。つまり、対人的環境が大きく変わって、親以外の他者との間に暖かい情緒的体験をもつことにより、愛着関係のモデルが変化する (Ricks, 1985; Main, 1985; Bretherton, 1988) と考えられる。親への対人的信頼感の形成要因は、親の養育態度による環境的な要因と子ども側の個人差要因である (Reiss, 1995) という指摘を考慮すると、幼児期に親との関係が不安定だとしても、幼児期以後親以外の他者と安定した関係を築ける場合、あるいは個人差要因が幼児期の否定的環境的要因を乗り越え同一性が確立された場合には、幼児期の否定的関係から青年期の肯定的関係に変化し得ることも可能性として排除してはいけぬ。従って、乳幼児期における母親との愛着関係が後の人格発達に間接的影響を及ぼすことは否定できないが、親以外の他者と安定した関係を築き、不安定な関係を修正するような情緒体験があれば、その影響を和らげることが可能である (Toth, & Cicchetti, 1996)。

以上の理論を整理すると、幼児期に親の愛情に満たされた経験が少ない子どもの場合には、心の中に「親に対する基本的な信頼感」が確立され難く、幼児期の形成された親に対する不信感とその後の青年期の同一性確立にも影響を与え、同一性混乱に陥った場合に不適応の引き金となることは可能性として考えられるが、幼児期の親の養育態度が青年期の不適応に直接影響及ぼすことは考えられにくい。同一性確立というのは、自分の心の中から出るといふ内発的な個人の特性要因に属するものであると同時に、他者との関係を全く断ち切った状態で同一性を形成することも有り得ない (Archer, 1993)。すなわち、幼児期の親の養育態度が青年期の同一性確立の際に影響を及ぼすことは事実であるが、青年側の個人差要因が、幼児期の親の否定的な養育態度の環境を乗り越え、青年期に同一性の確立された場合には、環境的要因の影響が弱くなることも予測される。

### 3) 青年期の同一性を育てる教育的・職業的環境

大学に進学する青年はそれ以外の進路を選択する青年に比べて、同一性探究を長時間にわたり体験し、また後に引き延ばす傾向がある (Kroger, 2000; 下山, 1983)。大学環境や大学生という身分が提供する探究のための資源

は重要である。就職活動や職業決定は大学生の同一性形成にとって重要な意味をもつことと指摘されている(下山,1986;高村,1997)。就職活動の中で自己や職業についての情報を集め、それらを統合する活動や、自分の就職活動について振り返り、それらを吟味するという思考的活動は、職業を得ることのみではなく、青年期の自己形成に寄与するものである(浦上,1996)。

大学生男女の職業に関する考え方には特徴的な差が認められた。男性の場合、生き方に関する語りの大半は職業に関する内容であり、家庭生活や地域生活に関する内容はほとんど見られなかった。職業を人生の中心と位置づけて職業に経済的責任と人間的成長の役割を認め、家庭生活は副次的なもののみとなしていた。これに対して女性の場合は、職業は自分の理想や考えだけでは決定できないことが示される。女性は男性よりも他者との相互依存性を強く期待する(柏木,1997)という自己の視点から、未知のパートナーや社会における現実に委ねるため、将来の職業生活を展望した時に自己の視点が曖昧になってしまう。職業選択が主体的な探究によって明確にされ難いことは、教育環境において男女平等を享受する大学生にとっても、現実の壁にぶつかる女性の同一性形成のプロセスの状況を反映しているかもしれない。

## 結論

本研究では、青年期の不適応を「幼児期の否定的親子関係」、「同一性混乱」という観点から考察した。乳幼児期における母親との愛着関係が後の人格発達に間接的影響を及ぼすことは可能性として否定できないが、それが愛着関係の質の連続性につながるには言いにくいと考えられる。なぜなら、青年期は、今までの自己像を再構築し、現実に立脚した自己像を構築できる時期であるからである。自己概念の形成期である青年期において不適応の症状は、幼児期における親子関係の否定的経験からよりも、同一性混乱が原因で引き起こされることが多いと考えられる。

今まで、乳幼児期における親子の関係の研究は、乳幼児期に形づくられた愛着に関するイメージが、その後の時間経過の中で恒常的に維持されるという愛着の連続性を唱える研究が続けられて来た。これまでの愛着の研究では、早期の愛着パターンからその愛着パターンや適応をかなりの確率で予測できることを示す報告が中心で、愛着のパターンが変化した個人についての研究の業績はまだ体系的に蓄積されていない。例えば、親への愛着は、自尊心(Engels,Finkenauer,Meeus & Dekovic,2001)、抑うつ(Laible,Carlo& Raffaelli,2000)、同一性(Lapsley,Rice & FitzGerald,1990;Samuolis,Layburn & Schiaffino,2001)、大学への適応(Kenny,1987)、対人関係(Markiewicz,Doyle & Brendgen,2001)に影響を与えるという研究が報告されている。これらの研究は、個々の人の発達早期に形成された愛着関係がその後の対人関係のあり方を規定すると結論づけている。

これに対して、Eriksonの生涯発達論における「人間発達8段階」は、個人の自己が、他者との相互的なかわりの中から現れることを強調し、人格発達における他者との関係性の役割を重視した。これまでの親子関係の研究では、乳幼児から思春期までの発達がとりわけ重要視され(Freud,1905)、本研究のように愛着のパターンが変化した青年期研究の業績が蓄積されていなく、また同一性研究においても、他者の存在や他者との間の関係性を含む視点を持つ研究は現在のところそんなに活性化されていない。

同一性・ステータスの関係の研究によると、高い同一性確立群は充実感を感じる事が高いことを指摘している(森・河村,2001)。充実感は、青年期の同一性形成という主題に関連して感じられるだけでなく、青年期以前の人形成においても実感され、青年期以降の親密性や、成人期の生殖性の達成感にも感じられる(大野・若原・三好・内島,2004)。すなわち、同一性形成は青年期に終わるのではなく、生涯にわたって続くプロセスである。中年期や老年期においても、同一性の再構成が起こる(杉村,1998;岡本,1985)。このように、他者との関係性も、生涯にわたって変化しながら続いていくものである。すなわち、自己の視点に気づき、他者との視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の間に視点の食い違いを相互調整によって解決する作業が生涯にわたって続けられていくことになる。

母子関係の乳幼児期における愛着の重要性は否定されるべきものではないが、幼児期以後の経験も、それが豊かなものであれ、剥奪なものであれ、同様に人間の発達の連続性と不連続性、安定性と変化に影響を及ぼすものである(清水,1999)ことを考慮しなければならない。今後課題としては、長期にわたる人間関係には、多様な要因が複雑

に關与する(大日向,2001)という点を再認識すると,家族内力動關係や社会的文化的環境の問題も含め,包括的・多面的に親子關係を扱った,愛着パターンが變化した研究や自己と他者との両方を視野に入れ,關係性を重視する青年期の同一性に焦点を合わせた研究を重ねていくことが必要であると思われる。また,発達早期に安定した愛着を築かなかった個人の場合には,どの程度まで回復可能なものであるのか,どのような援助が有効なのか,親以外の他の対象が親への愛着を補償してくれえるのか,その場合どの程度補償されるのかについて検討することが,青年の社会適応を援助する上で必要であると思われる。

## 引用文献

- Adams,G.R., & Marshall,S.K. (1996).A Developmental social psychology of identity: Understanding the person-in-context. *Journal of Adolescence*,19,429-442.
- Archer,S.L. (1993). Identity in relation contexts: A methodological proposal. In J.Kroger (Ed.), *Discussion on ego identity* ,75-99. Hillsdale,NJ: Lawrence Erlbaum.
- Archibald,A.B.,Linver,M.R.,Graber,J.A.,&Brooks-Gunn,J. (2002).parent-adolescence relationship and girl's unhealthy eating: Testing reciprocal effects. *Journal of Research on Adolescence*,12,451-461.
- Bowlby,J. (1973).*Attachment and loss*.Vol.2.Separation,New York :Basic Book. (黒田実郎 訳 (1977). 母子關係の理論Ⅱ 分離不安. 東京: 岩崎学術出版社)
- Bretherton, I. (1988).Open communication and internal working model : Their role in the development of attachment relationship. *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln, NB: University of Nebraska Press.57-113.
- Brittain,C.U. (1963). Adolescence choices and parent peer cross pressures. *American Sociological Review*,28,358-391.
- Chodorow,N. (1978). *The reproduction of mothering : Psychoanalysis and the sociology of gender*. Cslifornia: University of California Press (大塚光子・大内菅子 訳 (1981). 母親業の再生産. 東京: 新曜社)
- Cooper,C.R.,&Lopez,S.A. (1985). Family and peer systems in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*,5,9-21.
- Engels,R.C.M.E.,Finkenauer,C.,Meeus,W., & Dekovic,M. (2001). Parental attachment and adolescent' emotional adjustment: The associations with social skills and relational competence. *Journal of Counseling Psychology*,48,428-439.
- Erikson,E.H. (1959).Identity and the life cycle. New York: W.W.Norton.
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人關係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究 ,49,146-155.
- Furnham, A. & Adam-Saib,S. (2001). Abnormal eating attitudes and behaviours and perceived parental control: A study of white British and British-Asian school girls. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*,36,462-470.
- Gilligan,C. (1986). もうひとつの声 : 男女の道德觀のちがいと女性のアイデンティティ (岩男寿美子, 監訳) 東京: 川島書店 (Gilligan,C. (1982). In a different voice: *Psychological theory and women's development*. Cambridge,MA:Havard University Press)
- Grotevant,H.D.,& Cooper,C.R 1985 Patterns of interaction in family relationship and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development*,56,415-428.
- 林美奈・岡本裕子 (2003). 青年の家族行事体験が家族アイデンティティ形成に及ぼす影響 青年心理学研究 ,15,17-31.
- 船津 衛・安藤清志 (2002). 自我自己の社会心理学 東京: 北樹出版
- Josselson,R.I. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*,2,3-52.
- Josselson,R. (1996). *Revising herself: The story of women's identity from college to midlife*. New York: Oxford University Press.
- 柏木恵子 (1997). 行動と感情の自己制御機能の発達: 育児文化との関連で. 柏木恵子・北山 忍・東 洋 (編) 文化心理学: 理論と実証 180-197. 東京: 東京大学出版会
- 加藤 厚 (1989). 大学における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究 ,60,184-187.
- Kenny,M.E. (1987). The extent and function of parental attachment among first-year college students. *Journal of Youth and Adolescence*,16,17-29.
- Kroger,J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA:sage.
- Laible,D.J.,Carlo,G.,& Raffaelli,M. (2000).The differential relations of parent and peer attachment to adolescent adjustment. *Journal of Youth and Adolescence*,29,45-59.
- Lapsley,D.K,Rice,K.G.,&FitzGerald,D.P. (1990).Adolescent attachment, identity, and adjustment to college: Implications for the continuity of adaptation hypothesis. *Journal of Counseling and Development*, 68,561-565.
- 前川浩子 (2005). 青年期の体重・体型へのこだわりに影響を及ぼす要因一親の養育行動と社会的要因からの検討 慶應義塾大学大学院社会学研究科 パーソナリティ研究 ,13,129-142.

- Marcia,J.E. (1964). *Development and construct validity of ego identity status*. Unpublished doctoral dissertation. The Ohio University.
- Marcia,J.E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*,3,551-558.
- Marcia,J.E. (1976). Identity six year after: A follow-up study. *Journal of Youth & Adolescence*,5,145-160.
- Markiewicz,D.,Doyle,A.B., & Brendgen,M. (2001). The quality of adolescent's interpersonal relationship, attachment to parent and friends,and prosocial behaviors. *Journal of Adolescence*,24,429-445.
- 楠見 孝 (1995). 青年期の認知発達と知識獲得. 落合良行・楠見 孝 (編), 講座 生涯発達心理学 4: 自己への問い直し青年期 ,57-88. 東京: 金子書房.
- 森美海子・河村茂雄 (2001). 大学生における同一性地位と充実感に関する研究 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要 ,11,115-125.
- 村瀬孝雄 (1976). 青年期危機概念をめぐる実証的考察. 笠原 嘉 (編) 青年の精神病理 1 東京: 弘文堂.
- 長尾 博 (1999). 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究 47,141-149.
- 丹羽知美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究 13,156-169.
- 落合退行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあいかたの発達の变化 教育心理学研究 ,44,55-65.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究 ,33,295-306.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究 ,53,307-319.
- 大日向雅美 (2001). 母性研究の課題: 心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか. 教育心理学報 ,40,146-156.
- Radke-yarrow,M.,Zahn-Waxler,C.,& Chapman, M. (1983). Children's pro-social disposition and behavior. In Mussen,P.H. (Ed.) *Handbook of child psychology*. New York: Wiley.
- Reiss,D. (1995). Genetic influence on family systems: Implication for development. *Journal of Marriage and the Family*,57,543-560.
- Rick,M.H. (1985). The social transmission of parental behavior: Attachment across generation. In I.Bretherton, & E. Waters ( Eds.) *Growing points in attachment theory and research. Monograph for the society for research in child development*, 50,211-227.
- 齊藤久美子 (1993). ジェンダーアイデンティティの初期形成と「再接近期危機」性差 精神分析研究 ,37,41-51.
- 酒井 厚 (2001a). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み—性格心理学研究 ,9,59-70.
- 酒井 厚 (2001b). 青年期の親密な他者との関係における信頼感 ヒューマンサイエンスリサーチ ,10,79-93.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞築城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親及び親友との信頼関係と学校適応 教育心理学 ,50,12-22.
- Samuolis,J.,Layburm,K.,&Schiaffino,K.M. (2001).Identity development and attachment to parents in college student. *Journal of Youth and Adolescence*,30,371-384.
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか (2003). Ochse & Plug の Eriksson and Social Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究 ,45,65-76.
- 清水弘司 (1999). 幼児期の母子分離型と青年期の自己像—連続性と転機の検討—発達心理学研究 ,10,1-10.
- 下山晴彦 (1983). 高校生的人格発達状況と進路決定との関連性についての—研究. 教育心理学研究 ,31,157-162.
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究 ,34,20-30.
- 塩見邦雄 (2000). 社会の形成と発達 塩見邦雄 (編著) 社会性の心理学 東京: ナカニシヤ出版 Pp 3-20.
- Skoe,E.E. (1998). The ethic of care: Issues in moral development. In E.E. Skoe,& A.L. von der Lippe (Eds.), *Personality development in adolescence: A cross national and life span perspective* (143-171). London: Routledge.
- Steinberg,L. (1995). Commentary: On developmental pathways and social contexts in adolescence. In L.J. Crockett, & A.C. Crouter ( Eds.), *Pathways through adolescence: Individual development in relation to social contexts* ,245-253. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からの捉えなおし 発達心理学研究 ,9,45-55.
- 杉村和美 (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本裕子 (編) 女性の生涯発達とアイデンティティ: 個としての発達・かかわりの中での成熟 (55-86) 京都: 北大路書房
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探究: 2年間の変化とその要因 発達心理学研究 ,12,87-98.
- Sullivan,H.S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W.W.Norton.
- 高村和代 (1997). 進路探究とアイデンティティ探究の相互関連プロセスについて: 新しいアイデンティティプロセスモデルの提案. 名古屋大学教育学部紀要 (心理学) ,44,177-189.
- 鎌幹八郎・山下 格 (2001). アイデンティティ 東京: 日本評論社.
- Thorbecke,W.,& Grotevant,H.D. (1982). Gender differences in adolescence interpersonal identity formation. *Journal of Youth and Adolescence*,11,479-492.
- Toth,S.L.& Cicchetti,D. (1996). Patterns of relatedness, depressive symptom, and perceived competence in maltreated children.



*Journal of consulting and clinical Psychology*, 63,32-41.

浦上昌則 (1996). 就職活動を通しての自己成長：女子短大生の場合. 教育心理学研究, 44,400-409.1

## 註

1 Erikson の人生の発達では、特にパーソナリティ発達のための決定的な契機となる危機 (crisis) が存在し、それらの危機への取り組み方、解決の仕方が、パーソナリティの成熟に関する個人差をつくりあげていくとされている。Erikson は、各段階で個人が出会う発達上の危機を、いずれも肯定的特性と否定的特性の対によって表現し、パーソナリティ発達は、必然的に相対する特性が表裏となり、否定的特性を克服しながら、肯定的特性が強く機能するように均衡化されることが望ましいとされている。

青年期に個人は同一性確立対同一性拡散 (identity diffusion) という心理・社会的危機を解決しなければならない。青年期のほかに幼児期、早期児童期、遊戯期、学齢期、初期成人期、成人期、成熟期には、それぞれの特有な心理・心理社会的危機が存在する。同一性拡散という用語はその後同一性混乱 (identity confusion) と改められ、自己像の退行的分裂、同一性混乱の指標となるものであり、典型的には青年期の段階に否定的特性として示されている。本論文では同一性確立に対立する概念を同一性混乱として表記する。

(2007年1月12日受理)